

## 主 題：私の信条 2

## 聖書箇所：随所

今日も私たちは「使徒信条」をごいっしょに学んでいきます。人々が何世紀にも亘って告白し続けて来た信仰者、クリスチャンの信仰を見ていきたいと思えます。「使徒信条」、それは私たちひとり一人、イエス・キリストを信じた者たちの信条です。私たちが何を信じているのか？もう一度読みます。

「我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず。我はその独り子、我らの主、イエス・キリストを信ず。主は聖霊によりてやどり、おとめマリヤより生まれ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死にて葬られ、陰府にくだり、三日目に死人の内よりよみがえり、天にのぼり、全能の父なる神の右に座したまえり。かしこより来りて生ける者と死にたる者とを審きたまわん。我は聖霊を信ず。聖なる公同の教会、聖徒の交わり、罪のゆるし、からだのよみがえり、とこしえのいのちを信ず。アーメン」

最後の「アーメン」はひとり一人が心の中で言うべきだと信じます。繰り返しますが、これはイエス・キリストを信じているあなた自身の「信条」です。あなたと関係がないものではなく、イエス・キリストを信じる者たちはこのことを信じているということです。この後学んでいきますが、恐らく、こんなに深く考えていなかったということがたくさんあるかと思えます。残念ながら、今日は全部を終わらせることはできません。余りにも深すぎて、余りにも豊かな宝がこの中には記されています。見ていきましょう。

## A. 父なる神

先週見たのは「我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず。」でした。

## 1. 全能の父なる神 : このことばで始まるこの信条

「父なる神」はどんなお方なのか？主イエス・キリストを愛された。また、イスラエルを愛された。そして、イエス・キリストを信じる私たちを父として愛してくださっています。どれほど大きな愛をもって私たちが愛されているのかを知ることになります。また、「全能の父」と言われています。恐らく、多くの方は「全能」というと「どんなことでも出来る、不可能のない神だ」と神の属性を考えるでしょう。でも同時に、学んで来たように、神はどんなことでも出来る、また、「為す権利がある」ということでした。ですから、私たちは神が為さることに對して「つべこべ」言わないのです。いったい、私たちは何者か？と…。神が為しておられること、最善のことしか為さらない神、もちろん、私たちから「なぜ？」と思うことは事実です。でも、私たちは神を知ることによって、この方が為さることは常に最善であることを知っています。だから、その方に委ねるのです。その方を信頼します。それに値する神だとこの「信条」は私たちに教えるからです。

## 2. 天地の造り主 : 創造主

同時に、「天地の造り主」、つまり、創造主であると教えます。これは、私たちがかつて手を合わせて来た存在とは全く違うということを教えています。私たちが手を合わせて来た存在は創造主ではありません。被造物でした。人間であったり動物であったり、また、人間によって造られたものです。また、確かに、あるものによって日本ができたという神話を耳にしました。でも、あくまでそれは神話です。根拠がありません。しかし、この聖書は私たちに神とはどういうお方を教えています。

## \* 神は「天地の造り主」

・無からすべてを造られた : 黙示録4:11に「主よ。われらの神よ。あなたは、栄光と誉れと力とを受けるにふさわしい方です。あなたは万物を創造し、あなたのみこころゆえに、万物は存在し、また創造されたのですから。」と書かれています。つまり、神はご自身が為さろうとされたことをすべてされたのです。偶然に存在するようになったものはありません。圧巻なのはイザヤ書40:25-26、28に記されています。「:25 それなのに、わたしを、だれになぞらえ、だれと比べようとするのか」と聖なる方は仰せられる。:26 目を高く上げて、だれがこれらを創造したかを見よ。この方は、その万象を数えて呼び出し、一つ一つ、その名をもって、呼ばれる。この方は精力に満ち、その力は強い。一つももれるものはない。」「:28 あなたは知らないのか。聞いていないのか。【主】は永遠の神、地の果てまで創造された方。疲れることなく、たゆむことなく、その英知は測り知れない。」、これが聖書が教える神です。これが私の神であり、そして、あなたの神であるはずで

すべてのものを造られたお方、全く何もないところから創造なさった方です。しかも、この創造のみわざを神はご自身のおことばをもってなさった。「光よ。あれ。」と言われたら光ができたのです。ご自身のおことばをもってすべてのものを創造されたのです。

・被造物には造られた目的がある : ですから当然、私たちに言えることは、この方がすべてをお造りになった以上、その創造には目的があるということです。神はただ何となくお造りになったのではありません。そして、みことばは私たちにその目的を教えてください。それは「創造主なる神の栄光を現す」ことです。この方のすばらしさを周りの人々に示すことです。どんなにすばらしい神か、どんなに偉大なお方であるかを示す、それが私たち被造物として造られた者の目的です。

神がすべてを造られたとき、神はそれを見て「よし」とされました。造ったものはすべて完璧だったからです。創世記1:4「神は光を見て良しとされた。神は光とやみとを区別された。」、もちろん、悲しいことに、罪によって汚染されてしまいました。でも、神によって造られた被造物は一生懸命、その目的を果たそうとしているのです。詩篇19:1に「天は神の栄光を語り告げ、大空は御手のわざを告げ知らせる。」とある通りです。神が造られたこの天、大空、自然界、すべて神の偉大さを私たちに示してくれます。だから、私たちはそれらを見て感動します。その偉大さに美しさに驚きます。

ローマ1:20でパウロはこう言っています。「神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められるのであって、彼らに弁解の余地はないのです。」、注目いただきたいのは「神の永遠の力と神性」がどのように現わされているのか？です。

「被造物によって知られ、はっきりと認められる」と書かれています。ということは、神の力、偉大さ、神の知恵、神の美しさ、これらは神が造られた被造物によって「はっきりと認められる」のです。だから、私たちはなぜシーズンが来ると花が咲くのか分かるのです。なぜ、渡り鳥は星を見ながら飛んで行くのか分かるのです。それはすべてそのようにデザインされた神がそのようにお造りになったからです。ということは、私たちもこの神によって造られたゆえ、そこに同じ目的があるということです。

そこでパウロはこう言います。Iコリント6:20「あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現しなさい。」、同じIコリント10:31にも「こういうわけで、あなたがたは、食べるにも、飲むにも、何をするにも、ただ神の栄光を現すためにしなさい。」と書かれています。一貫しています。すべての被造物がすることは「創造主なる神の偉大さを現わす」ことです。この方のすばらしさを。それが私たちが造られた目的であって、私たちはこの目的をしっかりと果たしているのかどうか？そのことを私たちひとり一人が考えなければならないのです。

讚美歌75に「ものみなこぞりて」があります。聖歌は86「造られしものよ」です。讚美歌は「ものみなこぞりて みかみをたたえよ、ハレルヤ、ハレルヤ。光のもとなる 火を造りましし みかみをたたえよ、ハレルヤ、ハレルヤ、ハレルヤ。」、原詩を訳すところとなります。1番は「私たちの神であり王により造られたすべての被造物よ、声を挙げて私たちとともに賛美しよう ハレルヤ、ハレルヤ。」、7番までありますが、7番は「すべてのものよ、創造主を崇めよ、そして、謙遜をもって神を礼拝しよう、神をほめたたえよ、ハレルヤ、ほめたたえよ、ほめたたえよ父を、ほめたたえよ子を、そして、ほめたたえよ霊を。三位にして一人なる神を、神をほめたたえよ、神をほめたたえよ、ハレルヤ、ハレルヤ、ハレルヤ。」

皆さん、「アーメン」と言いませんか？これが私たちの信仰だからです。私たちは我々を造られた神を心からほめたたえます。私たちが考えることは、これが私たちの神である以上、しかも、こんな目的で私たちを造ってくださり救ってくださった以上、私たちはその目的に沿って生きているかどうかを考えなければなりません。神の目的をもって私たちは造られたのですから、私たちはそのように生きているかどうかです。もし、あなたが神のためではなく、自分のために生きようとしているなら、この大切な目的を忘れてしまっていると言えないでしょうか？

皆さん、十戒を考えてみてください。よくご存じです。十の戒めを神はモーセにお与えになりました。その中でこの戒めがあります。これは出エジプト20:3-5に書かれています。「:3 あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない。:4 あなたは、自分のために、偶像を造ってはならない。上の天にあるものでも、下の地にあるものでも、地の下の水の中にあるものでも、どんな形をも造ってはならない。:5 それらを拝んではならない。それらに仕えてはならない。あなたの神、【主】であるわたしは、ねたむ神、わたしを憎む者には、父の咎を子に報い、三代、四代にまで及ぼし、」、こういう命令が神から与えられました。なぜ、こんな命令が与えられているのでしょうか？それは私たちはこのようなことをするからです。もし、しないのなら神はそういうことを私たちにいちいち「してはならない」とは言われません。私たちはこういうことをする者なのです。神以外のものを愛するし、神以外のものを崇拜するのです。偶像を容易に作ってしまいます。私たちの周りには神よりも大切なものがあるのです。

そして、私たちは生まれながらに神に従うことを拒んでいました。ですから、教会に來たり、また、だれかが聖書を通して「神に逆らったあなたはその罪を神の前に悔い改めて神に従いなさい」と言われても、「はい、そうです」とは言いませんでした。そんなことを選択すれば自由が無くなってしまおう、これは私の人生だから私の好きなように生きていきたいと言っていました。これは何をしていますか？

本来なら、私を造ってくださった神に従うべき者です。それなのに自分の思うように生きようとしています。その人にとって神よりも大切なのは自分なのです。言い方を変えるなら「自分自身を神としている」のです。

前回に話した英国の神学者クランフィールド師はこのように言います。「神の地位を手に入れ、自己中心的な生を送ろうと試みることが罪の本質なのである。」と。本来従うべき者が神の上に自らを置いて自分の思い通りに生きようとする。ときには、神に自分の思い通りになるように従うようにと命じてみたり、自己中心的に生きようと、そのように試みることが罪の本質だと言うのです。これは神に逆らうことであり、罪は歩むべき道から外れることです。礼拝すべき神を礼拝しないでそうでないものを礼拝することは罪です。仕えるべき方に仕えないで、それにふさわしくないものに仕えていこうとする、罪です。私たちはそのように生まれて来たのです。そして、悲しいことに、私たちは救いに与ってもそのような罪の性質はあるのです。私の人生だから好きに生きていきたいと。もしそうなら、あなたはもう気付いているはず。その人生には何の祝福もない、何の満足もないということです。なぜなら、本当の満足も喜びも神がくださるものであり、そのためには私たちは神のみこころを行い続けていくことが必要だということは、もう皆さんよくご存じです。

私たちが「私の神はどんな方なのか？」と問われて、「私の神はすべてを造られた創造主だ」と、そのように告白するときに覚えることは、私はこの方に従う責任があるということです。この方の栄光のために生きていく、それが私が生かされている目的だと、そのことを覚えなければいけないのです。だから、この信条を思い出すたびに自分自身の信仰を吟味するのです。この目的によって私は生きているか？と…。そのことを先ずこの信条は私たちに教えています。

## B. 子なる神

次は「我はその独り子、我らの主、イエス・キリストを信ず。」、つまり、「子なる神」についての説明が出て来ます。しかも、この中には「子なる神、イエス・キリスト」について10の説明があります。今日はそのすべてを学べないことは残念ですが、できるだけ見ていきましょう。

### 1. イエス・キリスト

1) イエス : これは初歩的なことかもしれませんが、「イエス」が名前でこれは「救い主」という意味があります。イエスが生まれる前、ヨセフはマリヤが身ごもったことを聞いて大変動揺しました。そのとき主の使いが現れてヨセフに「心配しなくてもいい」と教えて、なぜ、マリヤが身ごもっているのか、その説明をします。マタイ 1:20c-21「:20…その胎に宿っているものは聖霊によるのです。:21マリヤは男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。…」、生まれて来る子どもに「イエス」という名をつけなさいと。イエスという名の人はこの当時もいました。イエスだけがこの名をもっていたのではありません。ただ、この天使が告げたことは「この方こそ、ご自分の民をその罪から救ってくださる方です。」と書かれています。

当時の人々がこの名をつけるときには希望をもったのです。いつか救い主が我々を救ってくれるであろうと。天使が告げたのはその「救い主が来た」ことでした。この方が救い主だと言います。だから、「イエス」という名が意味していることは「この方は真の救い主だ」ということです。

2) キリスト : これは名前ではありません。これは「称号」です。つまり、イエスとはいったいだれなのかを説明しているのです。イエスが弟子たちに対して「あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。」と問われたときがあります(マタイ 16:15)。そのときにペテロが答えます。16:16「…あなたは、生ける神の御子キリストです。」と。「神の御子」「神のひとり子」、そして、「あなたはキリストです」と言います。

それでこの出来事があったときに主はこんなことを話されました。16:17「するとイエスは、彼に答えて言われた。「バルヨナ・シモン。あなたは幸いです。このことをあなたに明らかに示したのは人間ではなく、天にいますわたしの父です。」と。つまり、こういうことです。イエスが弟子たちに「では、あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。」と問うたときに、ペテロが「あなたは、生ける神の御子キリストです。」と答えますが、これはペテロが一生懸命考えてこのように言ったのでしょうか？そうではなかったことが17節のイエスのことばで明らかです。「このことをあなたに明らかに示したのは人間ではなく、天にいますわたしの父です。」と、つまり、ペテロは父なる神から導かれてイエスがだれなのかを正確に告白したのです。この告白は正確であり真実です。なぜなら、これは父なる神から来たものだからです。ということは、イエスを信じている私たちも、もし、人が「イエスはだれなのか？」と尋ねたときは「主イエスは生ける神の御子キリストです。」と答えるはず。神であられ、そして、私たちを救ってくださる「約束の救世主」です。

そのようにあなたは告白しますか？前回も見たように、悲しいことに、三位一体を否定するような人たち、聖書の無謬性を否定する人たち、そのような異端はイエス・キリストの神性をも否定します。皆

さんの家に周って来る人たちは「イエス・キリストは神ではない」と言います。聖書は明確にイエスが神であることを教えています。まさに、それらの教えは異端と呼ぶにふさわしい神に対する冒瀆であり、その人たちが何をしても、何を信じてそこに救いはありません。みことばに反する教えだからです。

皆さんに、イエスがいったいだれなのかをぜひ覚えておいていただきたいので、一箇所、ヘブル人への手紙1章を見てください。1：3「御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現れであり、その力あるみことばによって万物を保っておられます。また、罪のきよめを成し遂げて、すぐれて高い所の大能者の右の座に着かれました。」、ヘブル書の著者は、ここで主イエスに関して四つの大切なことを教えています。

**\*ヘブル1：3から、主イエスに関する四つのこと**

### 1) 神ご自身

(1) **神の本質**：「御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現れであり、」と、この方は「神ご自身だ」ということを教えるのです。確かに、イエスを見た人はイエスが完全に人であることが分かりました。イエスは100%人間です。ですから、私たちと同じように、疲れを覚えるし休息を必要とし、空腹を覚えました。そして、多くの人が思うことは「この人は肉体を持っている以上、神ではない」です。なぜなら、聖書には確かに「神は霊です」とあるからと言います。そこで、この著者は私たちに教えてくれます。

確かに、外見上は肉体を持っているから神ではないとするでしょう。しかし、問題は本質的なことです。「**神の本質**」と書かれています。「**本質**」とは「存在しているものの性質、本質、実質、神髄」です。その部分が父なる神と同じなのです。全く同等であるということです。

(2) **完全な現れ**：ギリシャ語では「カラクテアー」で、意味は「封印、しるし、刻印」です。これは「あるものや建物の正確な複製として」ということです。つまり、このみことばが私たちに教えてくれることは、肉体をもっていながらイエスは本質的に神そのものであって、また同時に、私たちがイエスを見ることによって、聖書が示している神がどういうお方なのかを知ることになるということです。イエスを通して真の神がどういうお方であるかを、そのことを知るのです。

例えば、イエスの「愛」を見たときにこれが「神の愛」だと知るのです。イエスは人々から嫌われている人たちのところに喜んで出向いて行きました。イエスはどんな人でも受け入れます。そこには「赦し」があった。イエスの赦しを見た時に神の赦しはこうなのだ、心から悔い改めたなら赦していただくと知ります。「あわれみ」を見ても人間のあわれみとは比較にならない、神だけがお持ちのあわれみを見ることができるのです。十字架に架かっているながらも人々にあわれみを示されました。

私たちがどんなに心を入れ替えて努力しても私たちは到底そんなことを真似することはできません。「父よ。彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」(ルカ23：34)と、十字架に自分を磔にしてそれを喜びながらイエスを嘲っている連中に対してイエスがなされたことは「父よ、彼らを赦してやってほしい」でした。ですから、イエスを見る時にまさにそこに神がどんなお方であるかを見るのです。そのことをヘブル書の著者は教えたかったのです。

コロサイ1：15に「御子は、見えない神のかたちであり、造られたすべてのものより先に生まれた方です。」とある通りです。また、同じコロサイ2：9には「キリストのうちにこそ、神の満ち満ちたご性質が形をとって宿っています。」とあります。最初に著者が言いたかったことは「イエスは神ご自身である」です。

### 2) 主権者なる神

二つ目は「その力あるみことばによって万物を保っておられます。」と、この方は「主権者だ」と言います。この方の思い通りにすべてのことは成るということです。だから、主権者です。この「保つ」とは「状態を持続させる、維持させる」ということです。だから、偶然に物事が進んでいるとか、偶然に物事が起こるのではないのです。ちゃんとそれを支配しておられる方がいるということです。だから皆さん、何が起こったとしても神はそれを見て慌てることはないのです。神はすべてのことをご存じだからです。主権者なるお方ゆえに神はすべてのことを支配しておられる、そのようなお方だということです。

### 3) 救い主

「罪のきよめを成し遂げて、」と、「救い主」だということです。だれも為すことのできない罪の聖めを与えてくださる唯一のお方だと言うのです。私たちがどんなに努力をしても私たちの心を聖めることはできません。神だけがそれを為してくださる、それができるお方だということです。そして、確かにイエス・キリストが罪を赦すことがおできになる救い主だということを証明したのが、あのイエス・キリストの復活です。復活によってこの方こそが罪人の罪を赦すことができるのだとそのことを明らかに証明したのです。

### 4) 執り成しの主

「すぐれて高い所の大能者の右の座に着かれました。」、実は、この「右の座」とは「最高の地位、最高の名誉、最高の権威の場所を表わしたところ」です。そこに着けるのは特別の人です。また、「着かれた、

そこに着座された、座られた」というのは「その働きが完全に終了したこと」を意味しています。イエスがこの世にお見えになったその目的を完全に達成された。だから、彼は着座されたのです。座ったのです。働きが終わったからです。救いは完成したのです。完璧な救いが主によって備えられたのです。そして感謝なことに、そこに着座されたイエスは今何をしてくださっているのか？今、私たちのために執り成してくださる、つまり、あなたのために祈ってくださっているのです。

皆さん、こうしてイエス・キリストがだれかを明らかにされました。神ですよ！唯一真の神です！同時に、この方は救いを成し遂げてくださり、救いを私たちに与えてくださり、しかも、今あなたや私たちのために祈ってくださっている。そんな神がどこにいますか？あなたの必要を一生懸命訴えなければ神はわからない、ではありません。あなたが訴える前からこの方はすべて分かっています。あなたに何が必要かも分かっています。ときには神はそれに基づいてあなたに訓練をくださり、細部に至るまで完璧な配慮のある方なのです。それが私たちが信じるイエス・キリストなのです。

## 2. 独り子

もう一度、この信条に戻って「イエス・キリストを信ず」と言いましたが、その前に「独り子」ということばがあります。「我はその独り子、イエス・キリストを信ず。」と。私たちに何を教えているのか？それは「聖書が教える三位一体の神は、父なる神だけではなくて神の独り子も実は同じように神だ」ということです。父なる神が紹介されていました。ここで「独り子」なる神が紹介されるのです。

ヨハネはヨハネの福音書 1 : 14 で「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。」と、ヨハネは 1 章の初めからずっと「ことばは神だ」ということを教えています。その神であることばが人となって私たちの間に住まわれた、人間になったということです。「私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。」この方は恵みとまことに満ちておられた。つまり、イエスは人としてこの世にお見えになる前から神の独り子として存在されていたということです。イエスは永遠に神の独り子なのです。神の独り子と言うから、この方が父なる神によって造られたのではないのです、この方は神の独り子として永遠に父なる神と同様に存在されているのです。この方を神の「独り子」と呼んでいるのです。

ですから、ヨハネ 3 : 16、皆さんはよくご存じですからもう一度思い出してください。「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」、イエスがこの地上に父なる神によって送られて来た、そのイエスは神の独り子であった。神の独り子、それがこの聖書が私たちに教えている神なのです。「父なる神」がいて「独り子なる神」がいるのです。このひとりの神が聖書によって教えられているのです。三位一体のもうひとりの神である聖霊はこの後に出て来ます。

「子なる神」はイエス・キリストである。そして同時に、この方は「独り子」とであると聖書は私たちに説明してくれています。

## 3. 我らの主

先ほども見たように、この方はすべての主権者だということです。「主」と呼ばれているのは、イエスが「神でありまた絶対的な支配者、最高位の主人」だからです。つまり、この「主」ということばを見るとときにこういう意味があるのです。「神」と言うこともできるし、同時に、「絶対的な支配者」と見ることもできるし「最高位の主人」という意味もあるのです。

私たちはイエスを信じてこの救いに与ったときに、いったいイエスの何を信じたのか？イエスがいたというそのことを信じたのか？イエスがすばらしい人だったということを知ったのか？違いますね。今まで見て来たように「イエスは神であること」を信じたのです。同時に私たちは、イエス・キリストが約束の救世主であることも信じましたが、この箇所が教えていることは、イエスを「私の主」として受け入れたということです。

残念ながら、安易な福音というか、人々が早くこの救いに与るようにと語り出したメッセージは「あなたは天国に行きたいですか？ではイエス様を信じなさい。地獄に行きたいですか？行きたくないでしょう？ではイエス様を信じなさい。」という「広い門」の福音が語られたのです。そのような福音のメッセージの中に必ず出て来ることは、イエスをあなたの主とするのは、信仰生活のある時点でそのようにすればいいのだということです。多くの人たちが「私はイエス様を救い主と信じるけれども、主と受け入れていない」と、そのようなことを聞くと私たちはその救い自体を疑問に思います。なぜなら、ローマ人への手紙 10 : 9 でパウロが救いのことをこのように語っているからです。「なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。」と。

ということは、救われるために私たちに何が必要か？ということです。「イエスを私たちの主と告白すること」とあります。神によって救いに与った人、その人はイエス・キリストを主と告白する人た

ちだということです。続く10節には「人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。」と書かれています。もう一箇所見ていただきたいのはIコリント12:3です。「ですから、私は、あなたがたに次のことを教えておきます。神の御霊によって語る者はだれも、「イエスはのろわれよ」と言わず、また、聖霊によるのでなければ、だれも、「イエスは主です」と言うことはできません。」「神の御霊によって語る者はだれも、「イエスはのろわれよ」と言わず、」とあります。このようなことを口にするのは聖霊によって語っていない、つまり、救われていない者たちだと言うのです。また、聖霊がその人のうちにいるなら、その聖霊によってその人は「イエスは主です」と告白する。つまり、「イエスは主です」と告白しない人はその告白をもたらす聖霊がないということです。

私たちがいつイエスを信じたのか、恐らく、どう考えても「分からない…」と言う人が多いでしょう。多分、そのときに信じたと思っていても後で本当に信じたかもしれないなどと、そんなことをいろいろと考えるのではなくて、今、ひとり一人が自分にこう問い掛けたいのです。「イエス様は私の主かどうか？」です。私はこの方に従って行こうとしているのかどうかです。それを考えるときに、私たちが同時に考えなければいけないことは、「イエスは私の主である」と認めているのであれば、そのような信仰生活を生きているかどうかということです。

イエスがこう問い掛けています。「なぜ、わたしを『主よ、主よ』と呼びながら、わたしの言うことを行わないのですか。」、つまり、主と呼ぶなら、イエスの言われることを行っていこうとします。イエスが問われたのは「主よ、主よ」と呼んでいながら、なぜわたしの言うことをやろうとしないのか？です。今、私たちが見て来たように、「イエス様は我々の主だ」と私たちが告白するときは、「この方が私の主であれば私はこの方に従うという選択をした者だから、私はそのように生きているかどうか？」を考えなければいけないのです。もし、そのように生きていないのなら、この告白は全く虚しいものです。うそを言うことになりませんか？そのように生きていないのに「私の主」ですと言えるのでしょうか？

「イエス様が私の主だ」と告白するということは、私はこの方に従うということの表明です。もちろん、私たち信仰者もその歩みを振り返ったときに失敗だらけです。「主に従う」と言いながら、そうでないことを平気で行ってみたり、神が悲しまれると分かっているながらそれを選択してみたり、聖書のみことばが教えていることだと知っていながら、それを本当に心から受け入れられなかったりとか、いろんなことがあるでしょう。でも、神によって救われた者たちの共通した特徴というのは、その人の心の中に「私はイエス様に従っていきたい」という思いがあることです。なぜなら、イエス・キリストを「主」と受け入れたからです。そのように神が導いてくださったからです。神が私を救ってくださったから私は告白するのです、「イエスは私の主です」と。

クランフィールド師がこんなことを言っています。「キリストはその救いのわざによって私たちに所有し、それゆえ、私たちは信頼と忠実、そして、服従をもってキリストにゆだねていくということである。」と。私たちが覚えるべきことは、キリストはご自身のいのちという尊い代価をもって私たちに罪から買い取ってくださった。私たちの所有者は神だということです。その神に対して私たちの責任は何か？どのようにこの神にゆだねていくのか？それは「信頼と忠実、そして、服従をもってゆだねていくこと」と言います。皆さん、その通りだと思いませんか？これはもう私たちの人生ではないのです。神が私たちに託して下さっているのです。「わたしのために仕えなさい」と。だから、私たちはこの方に従って歩んでいこうとするわけです。「主は私たちの主である」「イエスは私たちの主である」、だから、私たちはこの方が喜んでくださることを心から願いながら、主の命令に心から従っていこうとするのです。

#### 4. 主は聖霊によりてやどり、おとめマリヤより生まれ

四つ目はこれです。大切な教理である「処女降誕」という奇蹟です。この教理はものすごく大切です。なぜなら、私たち罪人の身代わりとなるためには、その人に罪があっては身代わりとなれないからです。なぜ、イエス・キリストの降誕が「聖霊によって宿り、おとめマリヤから生まれて来たのか？」、私たちと同じでないのはどうしてか？それはこの人のうちに罪がないからです。罪がないお方だから、私たちの身代わりとなって十字架に架かって贖いを為すことができたのです。

ですから、イエスをさばいたピラトは祭司長たちや群衆に向かって「この人には何の罪もない」と言っています。ルカ23:4「ピラトは祭司長たちや群衆に。「この人には何の罪も見つからない」と言った。」、ヨハネ19:4にも「ピラトは、もう一度外に出て来て、彼らに言った。「よく聞きなさい。あなたがたのところにあの人を連れ出して来ます。あの人に何の罪も見られないということを、あなたがたに知らせるためです。」とあります。彼ははっきりと「イエスのうちに罪はない」と言っています。罪はなかったのです。ヨハネはまたこのように言っています。Iヨハネ3:5「キリストが現れたのは罪を取り除くためであったことを、あなたがたは知っています。…」、つまり、私たちを救うためにイエスは来てくださった、「キリストには何の罪もありません。」と、だから、この救いが可能となったのです。

私たちの中の立派な人を連れて来て、その人を私たちの罪の身代わりとして殺すことによって私たち

に救いが与えられるのか？与えられません。なぜなら、人間はすべて例外なしにみな神に逆らう者として生まれて来ているのであって、みな永遠の滅びに神のさばきを受けるその運命の道をたどっているからです。皆に救いが必要なのです。だから、神が、罪の無いお方が人として来てくださり、そして、その罪のないいのちをあなたの身代わりとして捨てることによって、この完全な救いを備えてくださった。神が人としてこの世に来るために、そして、あなたや私の身代わりとなるために、聖霊によって身ごもりおとめマリヤから生まれる必要があったのです。罪の無い者としてイエスはお生まれになった。ゆえに、イエス・キリストのいのちという代価は私たちの罪を完全に聖めてくださるのです。

#### 5. ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け

なぜ、この人物の名前が出て来るのでしょうか？先ほども見たように、ポンテオ・ピラトはイエスが無実であることを知っていながら、人々の要求に屈して主を十字架につけることを認めた人物です。なぜこの人の名前が出て来るのか？です。この名前が出ることによって主イエス・キリストが歴史上の人物であることを証明したのです。ポンテオ・ピラトは紀元26年から36年までの十年間、ローマ帝国の第5代ユダヤ属州の総督だったのです。歴史上の人物だったのです。この人物がイエスをさばいたのです。架空の人物の話ではありません。歴史上の人物です。そのことを明らかにしているのです。ポンテオ・ピラトによってイエスはさばかれた。彼は歴史上の人物であったということです。

#### 6. 十字架につけられ

すでに見て来たように、身代わりとしていのちを捨ててくださったのです。皆さん、私たちがこの十字架を見るときに一つだけ覚えてください。確かに、私たちはイエスの十字架を見るときに、そこに神の愛を見ます。確かにそうです。イエスはご自分のいのちを捨ててまであなたを救おうとしてくださった。そんなにも私たちを愛してくださっています。でも同時に、私たちが覚えなければいけないのは、イエスが十字架に架かったときに、イエスはあなたが受けるべき神の怒りのそのすべてをあの十字架で飲み干してくださったということです。

神は確かに愛です。でも、神は正しい聖い方であり、罪に対して怒りを持っておられます。これまでの歴史で証明したことは、神は罪をそれにふさわしくさばいて来られたということです。罪に対して「もういい、忘れてあげよ」とは言われなかった。すべての罪をちゃんとさばかれました。それが神です。そして、私たちの罪に対して神は見て見ぬ振りをするのではない、その罪に対して怒りを持っておられます。だから、イエスがあなたの身代わりとして十字架に架かったときに、神があなたに対して持っている怒りを、そのすべてをイエスはあの十字架であなたに代わってすべて飲み干してくださったのです。ここまでして神は私たちのために救いを備えてくださったのです。これが私たちの主なのです。

今日、私たちは「いったい私たちは何を信じているのか？」、「信条」というものを見て来ました。イエスはいったいだれなのか？救い主である。真の救い主であり、約束されていた救い主だと。独り子である。三位一体の神である。私たちが当然服従すべき主であると。おとめマリヤから生まれて来た罪の無いお方であり、そして、歴史上の人物であるポンテオ・ピラトによってさばかれて、そして、十字架であなたのすべての罪を負って、神の怒りの最後の一滴までこの方は飲み干してくださった。

皆さんにお尋ねしますが、これがあなたの信じているイエスですか？この方を皆さんは自分の主と仰いで、あなたの神と仰いで、救い主と仰いで、この方に仕えようとしていますか？これがみことばが私たちに教えてくださっている主なのです。これらのすべてを神が私のためにあなたのためにしてくださったのです。まさに、想像を絶することを神がしてくださったのです。

今日、終わるに当たって、私たちひとり一人が考えなければいけないことは、どのようにして私はこの神に感謝を表わすか？ということです。どのようにしてこの神にあなたは応えていきますか？それが私たちが神に対して出さなければいけない答えです。それが私たちの信仰生活です。神が何を望んでおられるのか？すでに見て来ました。神が望んでいることは、あなたが造られた目的に沿って生きることです。神のすばらしさを証する人物として、人々があなたを見たときにそこにイエスを見ますか？

私たちは正しいイエスを世に証していますか？それが私たちの応答であるはずですが。感謝なことに、神は私たちの弱さ愚かさを知った上で助けを与え続けてくださいます。私たちに必要なことは「主よ、そのように生きていきたい。神さま、あなたのすばらしさを証する者として私は生きていきたい。どうか、助けてください。」と、常に御霊に満たされながら、神のみことばに従っていくのです。そのときに、神はあなたを使って神のみわざを為してくださいます。神の栄光を現していくのです。どうか、ただみことばを聞くだけでなく神の助けをいただきながら、みことばを實踐してください。それしか神の栄光を現すことはできません。みことばに沿って、この新しい一週間、それぞれのところで歩み続けてください。